

見どころ3 知られざる国芳一門の作品群

国芳一門は歌川派の三大流派の中で最も隆盛を極め、多くの優れた浮世絵師を輩出しました。その系譜は最後の浮世絵師と称される月岡芳年によって引き継がれ、近代美人画家まで継承されています。当館では、国芳一門の作品にも光を当て紹介いたします。師匠の国芳にも劣らない門人たちの作品をご覧ください。



つきおか よしとし

月岡芳年 (1839-1892)

せつげっかのうち つき けぞりくえもん いちかわさんしょう

**雪月花の内 月 毛剃九右衛門
市川三升**

明治23年(1890)

国芳の門人・芳年が描く毛剃九右衛門。芳年は1839年に新橋の商家に生まれ、12歳で国芳に入門。残酷な無惨絵の描き手として知られ、血みどろ絵師と呼ばれた。強度の神経病を35歳で克服した芳年は、大蘇芳年と名乗り、国芳の画題や描法などを踏襲しつつも、西洋の絵画様式を取り入れ、新たな表現に挑戦し、最後の浮世絵師と呼ぶにふさわしい画業を展開した。



うたがわ よしつや

歌川芳艶 (1822-1866)

おおえやましゆてんたいじ

大江山酒吞退治

安政5年(1858)

国芳の門人・芳艶が、酒吞童子伝説を題材にして描いた作品。芳艶は、駕籠屋十ノ字の子として1822年に生まれた。15歳で国芳の門に入り、17歳の時、床屋の暖簾に描いた水滸伝の彩色が艶麗で評判になり、国芳から芳艶の画号を与えられたという。一時期生活が荒れ破門されるが、親友で博打仲間だった、歌川芳鶴の死を境に再び画業に戻り、45歳で死去するまで絵筆を取り続けた。



うたがわ よしかず

歌川芳員 (生没年不詳)

にったよしおきのたましいいかりてあだをむくうず

新田義興の靈怒て讐を報ふ図

嘉永5年(1852)

国芳の門人・芳員による作品。異国文化に興味を持ち文明開花絵を得意とし、横浜絵の開拓者の一人となった。新田義興は、南北朝時代の武将で新田義貞の次男。鎌倉の畠山国清を攻めた時、竹沢右京之亮・江戸遠江守に多摩川矢口の渡りで謀殺された。この時に義興は、「七生までも汝等が為に恨みを報ずべし」と言い残し自害した。村人たちは義興の怨霊を鎮める為、新田神社を建立した。



かわなべ きょうさい

河鍋暁斎 (1831-1889)

きょうさいひやつきょう どふけひやくまんべん

狂斎百狂 どふけ百万編

元治元年(1864)

国芳の門人・河鍋暁斎の作品。暁斎は1831年に下総国古河に生まれ、7歳で歌川国芳のもとで絵を学んだ。その後、国芳の素行を心配した父により狩野派の絵師、前村洞和に再入門した。独立後は狂斎と号し、主に戯画などで人気を博した。四十歳のとき、書画会で明治政府を風刺した絵を描いて投獄され、以後、画号を暁斎と改め、狩野派と浮世絵を取り入れた独自の画風を切り開いた。